〔書評〕

# 福田晃『神語りの誕生　折口学の深化をめざす』

真下　厚

折口信夫氏は「国文学の発生（第一稿）」において、

一人稱式に發想する敍事詩は、神の獨り言である。神、人に憑つて、自身の來歴を述べ、種族の歴史・土地の由緒などを陳べる。皆、巫覡の恍惚時の空想には過ぎない。併し、種族の意向の上に立つての空想である。而も種族の記憶の下積みが、突然復活する事もあつた事は、勿論である。其等の「本縁」を語る文章は、勿論、巫覡の口を衝いて出る口語文である。さうして其口は十分な律文要素が加つて居た。全體、狂亂時・變態時の心理の表現は、左右相稱を保ちながら進む、生活の根本拍子が急迫するからの、律動なのである。

と説き、巫覡たちの神がかりという現象のなかに「国文学の発生」を見出そうとした。

福田氏のこのたびの書はこうした折口氏の日本文学発生の仮説について、奄美・沖縄地方において氏が長年にわたって民間文芸の調査を行ってきた豊富な資料を主たる対象として、巫女（ユタ・カンカカリヤー）や神女（ノロ・ツカサ）からの聞き取り調査や彼女たちが執行する巫儀・祭儀の実地踏査の成果を関わらせて具体的に実証し、深めようとしたものである。

その章立ては次のようなものである。

第一編　神語りの誕生――奄美・沖縄の伝承世界――
序――折口信夫の「国文学の発生」に導かれて――
第一章　神語りの発生――巫覡の成巫過程のなかから――
第二章　祭儀のなかの伝承〔Ⅰ〕
――韻文体一人称の神語り――
第三章　祭儀のなかの伝承〔Ⅱ〕
――韻文体一人称の呪詞①――
第四章　祭儀のなかの伝承〔Ⅲ〕
――韻文体一人称の呪詞②――
第五章　祭儀のなかの伝承〔Ⅳ〕
――韻文体三人称の神歌――

第六章　祭儀周縁の伝承――散文体三人称の説話①――
第七章　祭儀外縁の伝承――散文体三人称の説話②――
跋――柳田国男の神話観にことよせて――
第二編　神語りの周縁――奄美・沖縄を越える――
第一章　宗教伝承の始原
第二章　巫祖祭文の基層――その成立をめぐって――
第三章　宮古島狩俣・祖神祭〈イダスウプナー〉考
第四章　イタコ祭文「岩木山一代記」の生成
第五章　神話と祭儀――「みあれ祭」をめぐって――

第一編「神語りの誕生――奄美・沖縄の伝承世界――」は、「序」において先に引いた折口信夫氏の文学発生論から説き起こし、「跋」において柳田国男氏の神話観（松村武雄氏の神話論をも取り上げる）に言及して結ぶ。その目的とするところは「奄美・沖縄の巫覡が「神の独り言」として語る言語伝承を叙事詩「神語り」の始原と把え、その誕生から展開に及ぶ伝承を動態的にあきらめようとする」（一六頁）ところにあるとする。

第一章「神語りの発生――巫覡の成巫過程のなかから――」では巫覡たちが成巫過程において陥るトランス状態のなかで神のことばとして聴く「神口」「神語り」を取り上げ、日常のことばとは異なる特別なことば・表現が生まれ出ようとする瞬間に迫ろうとする。この「神口」とは「神との問答体のなかで現れる」「一人称式に発せられる」「韻文体の」（三〇頁）「神の声」（三一頁）であり、また「神語り」とは「韻文体の一人称式の叙事詩ともいうべきもの」で「神自らが語る自叙伝とも称し得るもの」（三七頁）であるという。その違いは「神口」が「さまざまな内容をもって現れ出る」（三一頁）のに対して、「神語り」はその叙述内容が「神ダーリィという無意識のなかでありながら、巫者が半ば自覚した」（三七頁）もので「一定の主題をもつ物語（説話）に及ぶ」（三一頁）とする。そして、この「神語り」は「反復されて成長する可能性を含」み、「完成すれば、巫儀・祭儀の神語り（呪詞）として、再現できることにもな」（三七頁）るとして、そこに意識的・自覚的な言語表現の萌芽をみようとしている。第二章「祭儀のなかの伝承〔Ⅰ〕――韻文体一人称の神語り――」では、宮古島の巫者カンカカリヤーが執行する神への祈願の巫儀における言語行為は「巫者が神に向かって唱えるグイス（呪文）」「巫者に憑って語られる神のコトバ」「神のコトバを願い主に解釈するもの」（四七頁）の三部からなるとし、このうちのグイスは神授のものとされるが「成巫過程のなかで習熟された」（四七頁）類型的表現をもつこと、神のコトバは「祈願者の心情に応じて即興的に語られるもので、それが依願者の信頼に応えるもの」で、しかも「無意識的に巫者の口から発せられるもの」（四七頁）でありながら類型的表現をもつことに注意している。また、奄美・沖縄本島において巫者ユタの口から死者の霊・先祖霊のコトバが発せられる巫儀のなかの言語行為も基本的に三部からなるとする。第三章「祭儀のなかの伝承〔Ⅱ〕――韻文体一人称の呪詞①――」では奄美の巫者ユタや宮古島狩俣の神女が巫儀・祭儀のな

かで唱誦する呪詞を取り上げる。日光感精型巫祖神話や創世神話の内容をもつ呪詞は奄美の「ユタの成巫儀礼と響き合って生成され」（八二頁）たものとし、先の「神語り」が反復・成長して完成したものと位置づける。また、狩俣起源神話や兄妹始祖神話の内容をもつ神女たちの呪詞の成立については、彼女たちが「かつては共同体の祭儀のみに携わっていたのではなく、ユタ・カンカカリヤーに準じた個人に対する祈祷にもかかわ」（九五～九六頁）り、「非固定的な「神語り」をも実修していた」（九六頁）というところにその可能性をみようとする。第四章「祭儀のなかの伝承〔Ⅲ〕――韻文体一人称の呪詞②――」では、英雄の悲劇の物語の内容をもつ奄美ユタの呪詞はその子孫の家における巫儀のなかで現れた先祖霊の語るコトバが「一定の叙述内容を整えるに至ったもの」と論じる。また、宮古島狩俣の神女たちが唱誦する先祖語りの呪詞は元来一人称式に叙述されるものであるが、それには英雄の生涯の「みごとさ・めでたさ」をいうものと「痛ましさ・哀れさ」（一一五頁）をいうものとがあり、英雄の「叙事詩」の二面性を示しているのだという。第五章「祭儀のなかの伝承〔Ⅳ〕――韻文体三人称の神歌――」では祭儀のなかで神女などによって唱誦または歌唱される呪詞や神歌を取り上げる。創世神の国土創造から稲作り（または粟作り）起源までの創世神話の内容をもつ呪詞・神歌から国土創造の叙述を後退させて予祝的生産叙事歌へと変貌してゆくまでの様相を示し、また先祖の文化英雄としての所業を三人称式に叙述して称讃する神歌が先の一人称式の叙述をとる呪詞から展開したものとして位置づける。第六章「祭儀周縁の伝承――散文体三人称の説話①――」、第七章「祭儀外縁の伝承――散文体三人称の説話②――」ではともに日常のことばで三人称式に語られる説話を取り上げるが、第六章は「祭儀周縁」という「祭儀にきわめて近い時間・空間における場合」の伝承、第七章は「祭儀外縁」という「祭儀からはよほど離れた日常的な営みにおける場合」（一八〇頁）の伝承をそれぞれ対象とする。第六章はこうした「伝説的伝承世界」における国土の起源・人類の起源・文化の起源を説く神話の事例をあげ、祭儀の周縁で語り継がれてきたものであることを確認しようとする。第七章は「伝説的伝承世界」と近接した「昔話的伝承世界」（一八〇頁）の神話について論じる。「昔」という発端句や三度の繰り返し、地名・神名など伝承の固有性の捨象などという、昔話の叙述の特徴を手がかりとして、それらの神話の叙述を詳細に分析し、祭儀・信仰からやや遠ざかった世界で説話内容そのものへの興味からその叙述が展開してきた神話を見出そうとしている。

第二編「神語りの周縁――奄美・沖縄を越える――」では巫者の成巫過程におけるトランス状態や巫儀、神女・神職による祭儀などについて論じ、第一編の「神語り」を中心に論じてきたところからそれを生成・伝承する世界のほうに焦点を移している。その対象も奄美・沖縄地域に限るものではなく、山城賀茂社・近江日吉社の祭儀、土佐イザナギ流太夫の祭文、八丈島巫女や津軽イタコの巫儀・祭文、さらには韓国巫者の祭文など、そして数多く

の日本古典文学作品が取り上げられている。

さて、本書において奄美・沖縄の民間神話を中心として論じるのは、神話伝承の信仰との関わりが本土地域に比して「南島（奄美・沖縄）においては、さらに顕著である」からであり、「柳田氏がいう神話学は、奄美・沖縄ならば可能である」（二八一頁）からだとする。そして、第二編で論じられるように、そうした「神語り」の発生・展開の問題は奄美・沖縄の民間文芸の世界に限られるものではなく、時代や地域を超えてある程度の一般性・共通性をもち得るというのである。

神話伝承を祭儀のなかから外縁へというかたちで位置づけるとする本書の骨格はすでに氏の論文「民間神話の伝承世界――南島の視座から」（『日本伝説大系　別巻一〔研究編〕』みずうみ書房、一九八九年、『南島説話の研究』法政大学出版局、一九九二年、所収）において示されているが、そこでは「祭儀のなかの神話伝承（一）――村落共同体の祭儀」「祭儀のなかの神話伝承（二）――家族・個人の祈願」「祭儀周辺の伝承」「祭儀の外の神話伝承」というように分別して論じられている。これは松村氏の神話定義の範疇にそったものとされる。本書ではそこに示された分別についての考え方をもとにしつつも、折口氏の説にそって巫者の成巫過程における「神語り」の発生から説き起こし、折口氏のいう「律文要素」があるかないか、「一人稱式に發想」したものか否かという要素を加えてその展開が慎重かつ詳細に論じられることとなる。氏は本書以前にも折口氏が説くこうした日本文学発生論を手がかりとして日本の民間文芸について分類し（「言語伝承」『日本民俗学』弘文堂、一九八四年）、伝承文学の体系を提示している（『講座・日本の伝承文学　第一巻　伝承文学とは何か』三弥井書店、一九九四年）。本書は氏のこうした研究の系譜の上に立つものであり、折口氏が仮説的に提示した日本文学発生論を具体的、実証的に深化させたという点で日本文学研究において大きな意義をもつものといえよう。

本書は「神語り」の発生から展開へという現象を理論化しようとするものであるから、親ユタ・子ユタの関係が緊密であって成巫儀礼が体系化されている奄美ユタの場合と両者の関係が希薄で成巫儀礼も体系化されていない沖縄ユタや宮古島カンカカリヤーの場合との違い、自らの信仰体系を生み出してゆこうとする巫者ユタ・カンカカリヤーのありかたと自らの村落の信仰体系に帰着してゆくことになる巫者的神女ツカサ・サスなどのありかたとの違いなどは取り上げられていないが、こうした違いは呪詞の生成において関わらないかどうか。「一定の主題をもつ物語（説話）」としての奄美ユタの呪詞に対して説話としての創世神話を生み出しながら「一定の主題をもつ物語（説話）」として成長しない宮古島カンカカリヤーの呪詞、宮古島狩俣の起源神話として最高神女を中心に唱誦されるフサ「祓い声」が神女の「神語り」に生み出されたとしても神女はなぜ起源に向かうのか、というような問題。もっとも、これらは評者自身の課題でもある。最後に、狩俣祖神祭第二回「イダスウプナー」の「ユーナン」とあるのは「ユ

ナーン」の校正ミスであることなどに気づいたが、まことに些末なことであって本書の価値を些かも損なうものではない。

（A五判五〇二頁、三弥井書店、二〇〇九年六月二五日刊、九八〇〇円＋税）

（ましも・あつし　本学教授）